



ろば

百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分
於 東京家政専門学校2階
聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半
於 Zoom

連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
TEL/FAX 03-6273-2930

<http://www.hyakunincho-church.com>

郵便振替口座：00180-8-565379



私の目線(九三)

両親亡き後の日々

岩井 真美

この度原稿のご依頼を頂き少々戸惑いましたが、両親の亡き後の事等で良いと伺いましたのでお引き受け致しました。

母は二〇〇四年、父は二〇一一年に他界し月日を経て現在も実家に居る私は、今も両親に見守られているように感じています。突然の母の死後、日常の事を頼っていた父と私の生活は大変でしたが、今はそれも良い思い出となつていきます。バイオリンの私は仕事で長期不在の事もありましたが、父は頑張っていました。肺が悪く最晩年はどこへ行くのにも酸素が必要でしたので、コロナ禍を経験せずに良かったと思っております。

この数年は慣れないパソコンでの申請に四苦八苦しつつ文化庁などの支援を得て、人数制限をした演奏会等を行っていました。リモートレッスンも行い、発表会を続け、昨年個人で開いた会がお蔭様で何とか二十周年を迎えました。お弟子さんの中には看護師、先生、リモート疲れの新人社員、受験生もいて皆この状況下でストレスを抱えています。レッスンは唯一の楽しみと言ってもらえる事があり、私がパワーをもらう事もありました。最近では配信だけでなく、有観客公演やライブも再開し、久しぶりに生の演奏を聴いたと喜んで頂くようになりました。コロナ禍が始まった頃音楽は不要不急の扱いでしたが、よう

やく大事な存在となる時が訪れて嬉しく思っております。

ところで、掛井さんの『ろば』の彫刻です。がうちの玄関にも置かせて頂いています。昔父が掛井さんのご自宅を設計した折に設計料として頂いたようです。他にも以前うちにいらした時に亡き妹と私の演奏姿を描かれたスケッチ、妹が題材の彫刻、私が購入した小さな油絵等数々の素敵な作品があります。父の没後すぐ掛井さんから、美しく生きなさいと大変奥深い言葉のお手紙を頂きました。ピアノトリオの演奏会にもお誘いしてご夫妻でいらして頂きました。今頃父は、掛井さん、そして笹淵さんと一緒に天国で楽しく語り合っているかもしれません。

最後になりますが、この度のお声かけに感謝しつつも、日曜日、子供の頃は教会学校に通っていましたが、その後バイオリンを習い仕事を行い教会から遠ざかった日々を送っている事に自身の狭い思いもしております。しかし、牧師の祖父や叔父、教会建築に携わった父、信仰深い母達の存在、身近に浅野先生や内村先生のお言葉が飾ってある環境においてキリスト教とご縁は自ずと続いているのかもしれません。一方、三歳から始めた音楽も出来る限り続けてお役に立てましたらと思っております。この様に至らない私ですが宜しくお願い致します。五〇周年を無事に終えられました皆様に神様の祝福が豊かにありますように心よりお祈り申し上げます。

偽りの平和と安定

列王記上五・一―一四

賈 晶淳

今日はアジアサウンデーです。アジア教会協議会（CCA）という団体があります。日本基督教団も加盟教会の一つです。CCAはペンテコステの前の週をアジアサウンデーと決め、加盟教会と一緒に覚え、祈る日です。百人町教会は毎年、この日の席上献金をアジア基金として使っています。

先週、アメリカのバイデン大統領が来日し、アイペフ（IPEF・インド太平洋経済枠組み）とクアッド（QUAD・日米豪印戦略対話）の二つの会合が日本で開かれました。主にアメリカの利益を守り、中国を排除するための会合です。日本を先鋒に立たせ、韓国をその脇役とし、アジアでのアメリカの影響力を強めようとする覇権主義の産物です。また、今週金曜日にはソウルで日米韓の北朝鮮政策担当者の会議があるという報道がありました。韓国の政権交代で対北朝鮮政策が対立の方向へ変わっています。ロシアのウクライナ侵攻が続いている中、極東では朝鮮半島と中・台の間での緊張関係を高め、対中国パッシングに使うとしています。特に経済関連では、天然資源の獲得だけでなく、技術や製造分野

での競争も激しくなっています。このような動きはちよūd八〇年前の第二次世界大戦勃発の歴史を思い起こさせます。

本日は真の平和と安定のために働く有能な指導者とはどのような人物かを列王記のソロモン王と関連して学んでみようと思います。ソロモンは先代のダビデ王に続き、統一王国の王となり、知恵と識見を神に求めた（歴下一・一〇）といわれています。ソロモンの栄華という言葉に相応しい人物でした。そして、今日の聖書はその繁栄ぶりの内容で、ソロモンの多くの功績を記し、彼を偉大なる人物にしています。

本文の四節と五節を読みますと、ソロモンはとても優れた指導者のように見えます。ソロモンはティフサからガザに至るユーフラテス西方の全域とユーフラテス西方の王侯をすべて支配下に置き、国境はどこを見回しても平和であった。ソロモンの在世中、ユダとイスラエルの人々は、ダンからベエル・シエバに至るまで、どこでもそれぞれ自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下で安らかに暮らした。

近隣諸国を支配下に置き、国境はどこも平和であり、人々は自分のぶどうの木といちじくの木の下で安らかに暮らしたという。即ち平和と安定が守られる環境を整えていたとい

うことです。そして、真に有能な指導者とはこの平和と安定を当代のみでなく、次の世代にも譲り、続かせる人物だと思えます。

ソロモンの功績をもう少し詳しく見てみます。彼の功績は先代のダビデより優れたものでした。そして、彼の最大の功績の一つとは、やはりエルサレム神殿を築いたことでしょう。一三年間の神殿建築については列王記上五章から八章まで記されていて、それはソロモンの関連記事の半分ほどを占める量になります。更に、エルサレムの築城を行ない、自分のためにエルサレム神殿より大きい王宮を建てました。

ソロモンの支配地域は一節です。ソロモンは、ユーフラテス川からペリシテ人の地方、更にエジプトとの国境に至るまで、すべての国を支配した。国々はソロモンの在世中、貢ぎ物を納めて彼に服従した。

ユーフラテス川からエジプトの国境に至る地域とは、現在のヨルダン王国やイラクの一部を含む地域を指します。サウル王以来、現代に至るまでイスラエルがこれほど広い地域を領土にしたのはソロモン時代のみです。

また、軍備拡張にも励みました。六節です。ソロモンは戦車用の馬の厩舎四万と騎兵一万二千を持っていた。

この数値は驚くべきものです。ソロモンは巨大な軍事力をも持っていたという説明です。ただ、エルサレムを始め、ヘブロン、サマリヤ、ガリラヤなどの殆どが山地であるため、主にろばが重要な移動手段でありましたので、馬が引く戦車や騎兵とは平地での軍備であり、それらは外国からの防衛や外国を支配するためのものであったということです。

しかし、このようなソロモンの偉大なる業績と平和と安定は先代のダビデの時から用意されたものであります。本日の箇所ではありませんが五章一七節と一八節です。

ご存じのとおり、父ダビデは、主が周囲の敵を彼の足の下に置かれるまで戦いに明け暮れ、その神なる主の御名のために神殿を建てることのできませんでした。今や、わたしの神、主は周囲の者たちからわたしを守って、安らぎを与えてくださり、敵対する者も、災いをもたらす者もいません。

ダビデの功績についても少し申し上げますと、先代のサウル王は北の一〇部族の王でありましたが、ダビデはユダやベニヤミン族を入れた一二部族の統一王国を築き上げました（サム下五章）。

しかし、何故かこのようなダビデの遺志を受け継ぎ、優れた王のように見えるソロモン

について聖書の記録は厳しいところがあります。それはソロモンが多く素晴らしい功績を残したとしても、次世代に繋がるものでなかったということです。特に、ダビデから譲り受けた平和と安定を次世代へ譲れず、分裂や混乱のみを残した指導者であったためです。証詞の題を「偽りの平和と安定」とつけましたのはそのためです。

それではソロモンの平和と安定が偽りといえるのでしょうか。ソロモンの多くの功績は人民の犠牲の上で成り立つものであります。神殿や宮殿を始め、築城や軍備拡張などには莫大な費用と労働力が必要となります。結局、国の内外からの税収と賦役に頼ることになります。実際には収奪や強制によるものであります。それらはソロモンの出である南のエルサレムを中心とするユダとベニヤミンの二部族を除く形で、主に北の一〇部族からの収奪と強制によるものでした。ソロモンは北の一〇部族の自治権も奪い、エルサレム中心とする国造りをしたのです（一〇・二六以下）。結局、ソロモン治世には真の平和と安定というのではなく、その結果死後に南北に分かれ分裂王国となり、両部族間の憎悪と混乱だけが残りました（一二章以下）。

当然なことですがそれまでソロモンが支配下

に置いていた地域もすべて消えてしまいます。今年太平洋戦争から八〇年、終戦から七七年になります。聖書はダビデの四〇年とソロモンの四〇年、合わせて八〇年間に平和と安定が守られたと記しています。終戦後七七年間私たちは先輩らが守り、残してくれた平和と安定の中で過ごしてきました。大変感謝です。しかし、このような観点から現在の米・

中・ロ・日・韓の政治的指導者として選ばれた人物らは如何でしょうか。現在の国内外の状況や彼らの政治観や政策から見ますととても不安になります。ロシアのウクライナ侵攻以来ウクライナ戦線は新武器のテスト場となり、世界は武器の売買や軍備拡張のスピードを上げています。中国を始め、日本や韓国も軍事費が大きく膨れ上がっている上に、日本の政治家は核武装の事まで平気でいうようになりました。このような中で人権重視といながら貧しい人々の生存権は全く無視され、

コロナ禍で見えたように大国は、弱小国への配慮もなく、自国の利益のみを守るため、世界の分裂や対立を助長しています。私たちは次世代へ平和と安定の世界を残すことができるのでしょうか。それを共に模索し、実践していく世界になりますことを切に祈るのみです。（二〇二二年五月二九日証詞より）

コロナ禍と教会の未来

金井 美彦

コロナ感染は下火になりつつあるが、まだ先を見通せない。

今回のコロナパンデミックがひとまず落ち着いたのは、生物学・遺伝子工学の知見と技術の進歩によって、ワクチン開発の仕組みが全く新しいものとなり、きわめて短期間、しかも有効性の非常に高いワクチンが開発されたことによるとされる。しかし、人間の移動、物の移動が活発化し続ける現在、ウイルスの変異も活発になること、遺伝子工学の発展による新生物の「製造」が行われることによつて、感染症のリスクは今後も高くなるだろう。コロナ禍に見舞われたこの二年と少しの間で、生活が大きく変わった。マスクをする、外食さえしない、他人と直接声でコミュニケーションをとらない、「不要不急」の行動は慎む、三密をさける、などが結構律義に守られた。その結果、明らかにコミュニケーションの力が落ちたし、新しい人間関係の構築が困難となった。振り返っても、砧教会はかなりの期間閉めてしまったし、開けても人はほとんど来ない。自分自身も随分と行動制限してまった。先日、なじみだったビストロに行つたが、ほとんど二年ぶりだった。

この間、コロナにどう対処するか知恵を絞つたと思う。結局、一番の対処は、IT技術の活用だった。たった二年で、皆がZOOMその他の遠隔会議システムを導入した。これによって、端末さえあればどこにいても会議に出席できる。このシステムの背後には地球規模のインターネットがある。コミュニケーションの可能性は圧倒的に広がった。それだけでなく、あらゆる情報はデジタル化されてこの「網」に貼り付けられているため、そこにアクセスすれば、簡単に得られる。さらに情報だけでなく、モノやお金のやり取りもその網の上で手続きでき、実物のやり取りは宅配に任せるだけだ。そもそも、人間が動く必要がなくなりつつある。もちろん、「エッセンシャルワーカー」などと、もつともらしく呼ばれる人々、要するにモノや人間に直接触れる仕事（たいていは3Kである）はある程度残るが。

このような流れが加速度的に進行する中、教会もこの技術の恩恵を受けた。百人町は今のところほとんどバーチャル教会のようだが、砧教会は今のところ、リアルとバーチャル（といってもZOOMによる遠隔通信だが）の併用である。この形式が浸透すると、教会という場所は次第に意味が薄れていく。昔からラ

ジオやテレビで説教番組があつたが、そうしたものは今やありふれており、ユーチューブを使用して礼拝を配信するのは普通になりつつある。コロナはそれを劇的に進めている。ならば、いくつかのネット教会、ユーチューブ教会があれば済むのか、というところではない。テレビのように国家の許認可とスポンサーの支援がなければならぬのとは違って、ネット上の教会は別にそうした制約はない。それゆえ、きわめて自由な発信が可能となる。その結果、無数にネット上の教会が出現することになった。一方、それを利用する側は、漫然と選ぶのではなく、「いいね」や「高評価」がついているものを選ぶだろう。そして選ばれる側も「さくら」を用いて評価を高め、客を呼び込もうとするだろう。こうして教会は市場原理によつて淘汰されていく。リアルな教会ならなかなかそうはいかない。自分で直接行ける教会は限られるからだ。そして日曜にしか礼拝はないのだから。しかし、ネット上の教会はそれをクリアする。録画も含めれば、別に日曜の必要もない。あるいはチャンネルを切り替えるように、画面上で教会を切り替えることさえ行われるだろう。

こうして教会はリアリティを次第に失っていく。そして仮想の世界に現実が吸収されて

いく。今電車に乗ると、大半の人々がスマートフォントフォンの小さな画面を見つめている。これほど多くの人間が自分の気に入った世界に手軽に没入できる時代になった。自分の関心と嗜好嗜好に合わせた情報が与えられ、常に満足し続けていく。すべてがその人にふさわしい情報にふるい分けされて脳へインプットされていくうち、私たちはこの小さな窓の中で生きる生きることの方が現実なのであり、むしろ窓の外の方が夢なのだと感じ始めるのではないだろうか。そして教会もまたそのような窓越しに与えられる世界になるのだろうか。

これまで、教会は情報を聖書という窓に限定し、そこで与えられた文字情報（これだってデジタル記号だ）を宣教の基本信条に基づいて解釈し、教会の内部で完結するかのような世界観をつくってそれを押し付けてきた歴史がある。しかし、これほどに情報のグローバル化が進めば、当然、そうした閉鎖的な世界観は相対化され、その力は弱まる。もちろん、キリスト教の弱体化は近代の初めから始まっているが、今や加速度的に弱体化している。戦後の日本のキリスト教は、明治の頃の主体的なキリスト教とは違って、明らかにアメリカの占領政策と一体だったように見える。だからと言って、そのもたらした実りが悪か

ったとは言えない。しかし、結局は近代の、それもアメリカ的価値を前提にして、つまり物質的豊かさと勝者の植民地主義に日本のキリスト教者が媚びて、あるいはおもねって、つまりいつも顔色をうかがいながら、あるいは自分たちをそちら側に一体化させながら、歩んだように感じられてしまう。

しかし、もはやアメリカにも、おそらくヨーロッパにも、範とすべきキリスト教があるとは思えない。それどころか、グローバル化によって、すべて宗教は相対化されていく。そして、宗教もまた通販サイトの商品の一部になる。おそらく、教会も売りに出されるだろう。もちろん、それは建物ではない。一連の礼拝が「商品」となるのだ。

すると、リアル教会は不要となるか。しかし、そうはならない。なぜなら、窓の中の、端末の画面の中の世界は、いつも枠で区切られており、常に外との境界を意識せざるを得ない。ヘッドギアとゴーグルをつけて三次元のバーチャル空間に入ったとしても、もしその中で本当に走ったりすれば、やはりリアルな世界の境界に激突するほかない。要するに画面やバーチャル三次元は極めて矮小な経験しか与えない。もちろん、ロボットが遠隔操作できるように、感覚も含めて遠隔的

体験は可能かもしれない。しかしそれとて、距離を縮めることは不可能である。

それゆえ、リアルの世界は残り続ける。ただし、ほとんど人が手を付けない、荒れ放題のリアルな世界が残ることになる。すでにそれは始まっている気がする。バラ色のスマートフォントシテイは実は端末の画面だけであり、その外側は実は荒廃している。現に、世界を見渡せば「格差」と称して、リアルな世界の荒廃が始まっているのではないか。そのような近未来を想像したとき、再び私たちはリアルな集まり、近さの共同体、共に飯を食う共同体を欲していくに違いない。切り取られ、断片化され、極度に分業化され、すべてがサービスとなった世界にあつて、素手で世界を感じ取り、丸ごと青空を眺め、川や海に飛び込んで命の迸発を感じ取ることを忘れることはできないだろう。それゆえ、私たちは教会を必要とする。いや正確にはあのイエスを必要とする。彼は当時のがんじがらめのリアルのなかで、格闘し、巨大な当時の文明と対峙したのである。その心意気は、結局今も、あの聖書を通じてしか触れることができない。それゆえ、教会の中でも外でも、ともに読まなければならない、と思う。砧教会はその営みが続いている。

罪ある者とは

井谷 淳

「国破れて山河在り」という詩があります。杜甫という八世紀の唐の詩人の『春望』という作品であります。争いの絶えない中国の状況と戦禍に巻き込まれ生活を喪失する人々の有様をよく描写しています。山河は自然の秩序であり、国は人間の社会秩序であるという対比的な手法を用いているのですが、官僚である杜甫は国家存在の秩序の危険性を熟知していました。人間の社会秩序への嘆きが良く表現されています。聖書的に換言すれば「神の国」は神の創造された自然の中に在り、人間が創出した国家とは異なります。神の作り出す秩序と人間が作り出す秩序は全く異なるものである、私はそのようにこの詩を読みま

す。現在の露宇戦争はイスラエル民族のパビロン捕囚と酷似します。民族存亡の危機から国家情勢に翻弄される切迫した人間集団の意識が、神に頼り頼む信仰を強めてゆきました。大きな全体的存在が、小さな存在、マイノリティの存在を吸収し統合してゆく、人間もたらず秩序は非常に残酷且つ自己本位的であり、「多様性の在り方」を圧殺してゆきます。この例を表した映画をご紹介します。「許されざる者」という二〇一三年の日本映画で明

治初頭の激動の時代に翻弄される様々な人間群像を描写しています。名優「渡辺謙」が演じる元幕府伝習隊の凄腕の剣客「釜田十兵衛」は新政権の追手より北海道へ逃亡し、アイヌ女性と家庭を持ち、剣を捨て農民として生活を営みます。しかし様々な曲折を経て明治政府の開拓府の警察署長と敵対関係に成ってゆくのです。物語には搾取されるアイヌ部落の人々、遊郭に身売りせざるをえない境遇に置かれた女性達が描かれています。剣客十兵衛はこのアイヌ民族と女性達の側に立ち、同じく十兵衛と共に弱者の側に立った同胞の死を契機に警察署長と数十人の部下へ単身闘いを挑んでゆきます。激闘の末十兵衛は勝利し、その場に最後に残った功名心に燃える青年新聞記者にこのように告げます。「ここで起こった事のありのままを書け、但しアイヌと女郎（映画の原文のまま記します）の事は書くな、もし書いたら地の果てまで追ってお前を殺す」この物語の中で「罪ある者」は弱者から搾取する新体制側の人間のみではなく十兵衛自身も、己の存在を「罪に問われるべき者」として定めています。かつて徳川幕府の武士として搾取側に身を置き大勢の人間を殺戮してきた己自身は同様に「裁かれるべき存在」であるという自覚があったのです。イエスはヨハ

ネ福音書八章一節〜一一節の文節において律法学者と姦淫の女性の処断をめぐり対決を余儀なくされます。イエス自身も女性に石を投げる事はしませんでした。イエスも罪人なのでしようか？ 生家がフアリスイ主義でありその恩恵の中に居たイエスは律法の罪の危険性を熟知していました。女性を擁護しているのと同時に、かつては律法主義者と同様の構造的暴力の中にいた自身に関しては「罪人」と規定しているのです。人間の作る「国家」そしてその中でもたらされる「正義」という概念の危うさについてこの箇所は私達に考えさせます。人間の秩序である律法ではこの女性を救う事ができません。神の秩序であるイエスの言葉は、弱者への救済措置に満ちたものであり、この救済措置こそが「律法の完成」であります。最後の一一節においてイエスは女性に「私もあなたを罪に定めない、行きなさい」という言葉で括っています。「行きなさい」は「生きなさい」という意にも捉える事が出来ます。そしてイエスは「罪に定めない自分自身」と同時に「罪に定める資格の無い自分自身」をも女性に対して告白しています。ここに女性とイエスの同時代を生きる中で罪意識の共有があり、「共に生きてゆく」という共生意識が表されているのです。

平和へのメッセージ

ワレモノにつき取扱い注意

古野 明美

「平和」を実感した個人的経験は、なんと言っても一九四五年八月一五日に終戦を知った九歳夏の出来事である。敗戦ではあったが、その残念さより「もう空襲が無い」という解放感と喜びの方が大きかった。四月から疎開していた山口県の農村でも空襲の恐怖はあり、低空飛行での機銃掃射を避けるため白い服は不可、私たちは皆夏服を濃い色に染めていた。

実はこの空襲の恐怖の遠因は、三二年日本軍（関東軍）による中国への軍事侵攻にあった。政府より軍部の力が次第に強くなり、厳しい言論統制に報道機関も同調、国定教科書によって子供の私はすっかり洗脳されていた。夏休み明けの学校に来た進駐軍が剣道の道具などを押収、教育勅語掲載の修身教科書は焼却、他の教科書は不適切な箇所を墨塗りをした。翌秋一月三日、戦争放棄が入る新憲法公布、半年後四七年五月三日施行となった。

大戦終結後には国際連合が設立され、世界は一瞬平和になったが、間もなくの東西冷戦に続いて各地での戦乱があり、現在も一般市民が苦しむ地域はウクライナだけではない。

「平和」は壊れやすい。取扱い注意である。

平和を求める意義

尾池 幸

二一世紀になる現在、世界各地で様々な紛争が起こっている事は承知していても、まさか「核戦争」「第三次世界大戦」に繋がりがかねない事態が起こる等とは考えた事も無く只々驚くばかりです。

今の瞬間にも故郷を失い、生命の危機に瀕している人々が居る事は決して他人事とは思えません。わが国では、北方領土問題、中国との海域での紛争、北朝鮮からの度重なるミサイル発射、韓国との間でも慰安婦問題、徴用工問題、沖繩をはじめとする米軍基地問題、憲法改悪等々問題が山積しています。

この度ロシアがウクライナへ侵攻した事は人間の飽くなき欲望のあらわれではないでしょうか？もともと、米国や西欧諸国はロシアの横暴を許さない為にウクライナに大量の兵器を送るなどの軍事支援をして、今も戦争が続いている事は改めて言うまでもありません。

島国日本だからこそその危機も沢山あります。いざという時にウクライナの人々の様に日本人としてのプライドを維持していける様に心の準備をしておかなくてはいけないと強く思い、この不毛な争いが一日も早く終結して平和な世界が戻るように願ってやみません。

私の願い

斉藤 留美子

この冬、黒猫を保護しました。つやつやした毛並み。空から爆弾が落ちてくることはなく、銃を向ける人もいない。そんな国、日本に住めることに改めて感謝しているこの頃です。

ウクライナでは若い女性も男性も志願兵となっている。国を守るためだと言う。ロシアの戦車がウクライナ国境に集結し、一瞬にして侵略戦争が始まった。ロシア兵には、軍事演習と知らされていた。でも・・・実践。人が殺され建物は破壊され、人々は隣国に難民となって避難している。ポーランド、ハンガリー、モルドバ、ルーマニア、スロバキア、ヨーロッパの他の国々へ。どこの国もあたたかく迎え入れており、とにかくウクライナ人を助けている。

こうなつたのはウクライナがNATOに加盟したいと希望したからだ。プーチン大統領は大国を夢見て戦争をしかけた。核をもちらつかせ世界中の誰も止められない。ゆるせない。プーチン大統領のしている事は犯罪だ。騙されたロシア兵もウクライナ人も、なんとしても命が助かってほしい。唯一できる私の願いです。

図書紹介

『ディディの傘』

ファン・ジョンウン著

斉藤真理子訳

亜紀書房

ご存知ですか。日本で韓国文学が読まれていて、すでにブームの域を超え、固い読者層の心をつかんでいることを。その裾野の広がりには支えられ出版が続いていることを：。

「訳者解説」に依ると（ファン・ジョンウンは、現在の韓国文学界で最もラディカルな存在と言って間違いないだろう。一九七六年ソウルに生まれ、仁川大学仏文科を一年で退学、二〇〇五年に短編『マザー』が京郷新聞

の新春文芸に当選して小説家デビューした。社会の死角と痛点を見逃さない独自の視点を研ぎ澄まされた文体で完成度の高い小説を発表しつづけ、韓国日報文学賞、申東暉文学賞、大山文学賞、金裕貞文学賞など名だたる賞を受賞している。『ディディの傘』は、ファン・

ジョンウンのラディカルさが最も先鋭に表れた作品であり、二年ぶりの新作として世に出るや否や二週間で二万部を売り上げ一中略―「二〇一九年・作家五〇人が選ぶ今年の小説」という企画でも一位を占め読み手からも書き手からも強く支持された。さらに、光州民主化運動を記念する5・18記念財団が主催する5・18文学賞および詩人で独立運動家の韓龍雲にちなむ萬海文学賞を受賞している。〜というのです。

本書は、「d」と「何も言う必要がない」

の二つでひとつの連作小説です。「みんなが帰るころには、傘が必要だ」という言葉が本書の真ん中に置かれ、「d」と「何も言う必要がない」という二つの物語がそこで正面から向き合っています。その背後に、セウオル号事件遺族たちがいて、それに続くキャンドル「革命」が描かれている。これが大きな見取図でしょう。そして、二つはいずれも特異なラブストーリーであり、孤立と連帯、あるいは閉塞と突破の物語と言えるでしょう。

終りに、「日本の読者の皆さんへ」でファン・ジョンウンが伝えたかったメッセージの断片をご紹介します。

―前略―私は毎回、驚異とともにこの広場にいました。その広場でときどき、女性や少数者を嫌悪し排除する言葉を見聞きしました。私もキャンドル集会の成功を願った。当時の大統領の罷免を願って、国民の保護義務を擲っていた彼（原文のママ）の一日も早い拘束を願いましたが、「革命」だという考え方にはたやすく同意できませんでした。広場にはそれほど多くの人たちが集まり、大統領が罷免されても、韓国社会で少数者として生きる人々の日常が変わることはなかったからです。―中略―革命であれ、一つの社会の進化であれ、それがまだ到来していない瞬間で止め、「まだ」なのだ、「直前」なのだと伝えたかったのです。〜

（小野寺 寿々恵）

ろばのせなか

小学校教師の頃、夏になると戦争を扱った教材を使って、子ども達に、「絶対に戦争をしてはいけない」と教えてきた。しかし最近には、平和がいかに大切かみんな知っている筈なのに、被爆国日本でも核軍備の必要性を訴える人々がいる。

二月にロシアがウクライナに侵攻して以来、戦争が頭から離れない。しかし、私の日常生活は守られ、ウクライナの人々の惨状は変わらず、今も戦争は続いている。

この間、ウクライナやフィンランドが他国から侵略を受けてきた歴史を知った。戦前戦中に日本が国内外でしてきたことも見直すことになった。各国の自国第一主義と独裁者の言動に本当に平和を維持することの難しさを感ずる。今、世界で繰り広げられていることは、子ども達にしてはいけないと教えてきたことばかりだ。違いを認め、お互いを受け入れること、強いものは弱いものを助けなければいけないのに。

六月一九日に砦教会で笹渕昭平さんの記念会が行われた。石垣島から納骨の為に来られたいづみさんとご家族と共に昭平さんを偲ぶことができた。

井谷淳さんが教師の一人として百人町教会の仲間になられた。

百人町教会は本当に小さな存在だが、共に力を合わせて平和への道を進みたい。

（新谷 照子）